



中
卷

八

中村俊定文庫
文庫 18
97



にかくの品をのりて
まふ。は魚〜

才二番

丸 勝

素堂

西乃蛙コハ色言にあらと名也

丸

文麟

泥龜と門をあらぬ蛙哉

小田乃銀才コハと名は色と

よみらるに兩のかとつと色

高くとは泥乃中コハり力也

よ〜と〜不才の才哉紫い

ゆる龜乃隣のかとつ形ん

門を並らゆと云ふは在る

さ〜のまらひはと丸乃

蛙乃底らるりハ勢也

ゆる

才三番

丸 勝

嵐蘭

ふろくと我類ツラすはコハ也

右

孤屋

人あはれをけりるるに顔の蛙介

た中へ乃七文字の強さを

以て五文字の玉ゆるく形なり

うねるも田口とや白くオホなる

中には白く白く白く白く

とのまはりしつゝの文字と

ををらんトリヒメク減りしつゝ

ふは鬼拉トリヒメク一辨トリヒメクなる白

尔々侍ん右足音をさう物

志けしつゝさう物面白く

侍りしつゝたの方務めて

才四番

けりし

九持

翠紅

木乃りの種よりおと蛙介

右

濁子

毒負く物なりけり蛙介

飛々蛙介其はのあはれ

ひびきにそびく蛙の如く
乃心形をさゆはくまの
まはやほのあふくわ
あくわくわの成人のあは
とれつらんとかいし

才五番

丸

李下

簑くろくろくをいふくらんが蛙

ち勝

去来

一畦アキをふくくはやむ蛙哉

花乃白玄の道よりんんん
水鶏の形とすはゆわく
早苗のたはるをこの
簑くろくろくの性情ゆるく
やゆくくくは田畦をくく
似意コニヤカ濃く閑く蛙ア聲ア形と
ひびくもあふくあはれ
長ナガ是コト群ムラ蛙カエル苦ク相アヒ混マシ有アル時トキ也ナリ作シテ

不平鳴とよめ白河のくみ
ふか〜〜

才六番

持

友五

鈴とろ〜〜のよ体心驛哉

ち

琪樹

まのり〜〜の中よめあはれ蛙也

ちのり喜れ〜〜の経鈴乃

〜海の蛙心〜〜

物うん移さあ形ん中感友

〜〜たのり〜〜の角あは

〜〜と力をあ〜〜の〜〜

〜〜ふか〜〜〜〜云叶愈

ら〜〜り野徑乃か〜〜の眼

前〜〜可あ持

才七番

丸

朱絃

備いつ〜〜入おの〜〜亦備〜

又

右勝

紅林

いづ道やいづの軒よ入蛙

雨乃後の入お色づく僧

寺よりかゝりてたゞけり

寂しくけし侍道をも何道

の軒より入らるゝ心も先

く玉鉾もたをみたる丸

結方けしを心せりけり

才八番

丸

芳重

夕影や鏡はなまはるが蛙

右勝

扇雪

曙乃念佛くくはるがつ

花田ものかゝるけくをふ

うけく西をさくらみくけり

大に氣色けとあけり

右思ひくくはるをせり

念佛くくはる草庵の中

む殊勝しし

才九番

九勝

琴風

夕月東照より身を干し地

た

水友

飛うつつ猫之追ひ小蛇真

身細ゆい蛙夕月東照

叶ひ侍るたれうつらあ

時付白蛇にあらあ蛇らに

く小のかく元合行是也是

まの来りるるか海名所と

くはん用寒乃地をさ

いひむゆら一白多らり於

か(さう)に工業乃強

弱をとらはたのちあ

才十番

九

徒南

あはれの音え頼らる蛙

右 勝

松風

名もて辨 けしき寛うか

半、檐、疎、雨、作、愁、蝶、鳴、蛙、似、

與、幽、人、語、如、く、と、時、は、

あ、く、海、の、こ、よ、に、荷、撫、ふ、

魚、り、れ、と、も、一、白、あ、と、く、海、を

こ、く、云、深、の、ふ、ら、に、思、い、道

待、り、か、つ、る、子、五、文、字、す、り、乃

云、流、一、慈、鎮、西、行、の、日、質

中、あ、く、海、の、辨、か、く、こ
り、れ、と、右、の、勝

中十一番

丸

全峰

飛、く、く、く、海、の、辨、か、く、こ

右 勝

流水

藻、か、く、流、の、深、を、覗、く、蛙、か

海、來、つ、て、幽、也、よ、く、く、り、蛙

同、く、日、一、足、獨、舉、静、は、

く寒葦の中寝か公衆！
いず鷺登く日予人の中向
つゝ潔白の中ほろけを
要せし只魚をうらやむ心有
とは争ひや男困中一息
くくむ人をも云の潔うこれ
も蛙の志高遠ものせ
いふはこゝろとと見え見
解かなくほろけりゆへ

才十二番
丸持

嵐雪

うさぎやまをぬかす蛙

右

破笠

竹の奥蛙やしやあやあや

あやうしあや

うさぎや

才十二番
丸持

小親

ゆらりと蛙の中へ柳が

七

三四

多分、うげ多柳のほろ蛙が

二木乃柳ふひよあひく緑

たな色えらうきかりたし先

一^{ヒト}木の蛙をた乃枝末より

色うけうくとまふ歌乃こと

深柳うつにとうくと遠れる

木末よりそみ既のゆくと

一、あつきののちうさかけし

志ほりしをきかるとた乃

蛙を樹上よのちうたう

ゆらりと蛙うとまふ

浴めつたあひ玉篠もを敷

萩のうらなふとえいそ

たな志あてけらんけれ

板奇により好む随ひく

けちちあふうとあひ

此物と云ふ一巻乃のむら
古今乃等只この海く
身を色けしをさうくはえ
人を心くはらちる
才十叩番
丸持
ちり

右

山店

此物なる産み達よつら

うまの麻乃蛙流又柳川の
孫楚の舟の舟まらちを正
はらよまらちのたつたの
心句と文むせくはり
た右とよの勝負とをいし

才十五支

丸

橘義

巖形
一
家もやどは蛙外

右勝

蕉栗

若菜の如くわらわらふは流石
九事可^キ遊^ル辨^ル中^ノ事^ト也
常^ニあ^リて^ハ乃^ニ痛^クな^ル也
侍^ルを^シ中^ノ事^トも^ハ好^ク也
お^もい^はせ^しめ^して^ハ心^ノ弱^ク
や^はり^ん右^ノ流^ニま^りて^ハ
ま^りて^ハ軽^クな^ル也
く可^クな^ル侍^ノ心

才十六番

九

舉白

這如く々々背を流す蛙

右勝

く

評し我々の如く蛙

州之背強き蛙のけし
おふけりてあつたは
我子とあそぶ父母の如く
魚けりあつたは其衆
をけりての雛鳥ハ母

三
とくく 睡里乳燕哺ホ鳥
この蝶一と蝶之故所あり
風流乃外より心伝ふ
實ありむ惜しゆへし

才十七番

丸持

宗派

あなむをながつゝ上へ蛙声

七

嵐竹

新草や一るにつけある桂小

飛むを追ふ池とのつら
閑人の心もか叶へるもの歎
新草に刈りぬる竹
新草を去る竹の蛙幾行の
鳴をこゝろにん又捨りし

才十八番

丸持

杉風

山井之墨のたれとよ及蛙

七

故足

尾をふるくすの鳴あぬ蛙川

山井の蛙臺のたゞりも
くまねの心もくも幽玄か
しゆをよめよし水汲僧
のひく山井のあまの海岩
なまのあすすまひも冷く
くすもをふるあまのあひ
ささの松よかりく清水
るくよまきまほひあま

物くくさねくくあま心地を
あくと初乃外よ心ああれ
る所あまんた日影あまの
あ小田乃水あまの界あつな
まき持草えまのひく蝶
あんと飛くよあまのあつ子
のや大まにあまのあま
時あけひくあまのあまを以
あ持

才十九番

丸勝

卜宅

抛き出さく人跡くらん蛙が

丸

峡水

釣ゆてと聞しらうの蛙が

此番に判者抛きととも途

日を倦く物を忘ゆし

し。仍以判詞不審

丸くらめく

才九番

丸

くら

う起めら舞のなき青も雨あが

丸

才角

うが。蛙の江は星の夜

う起めらと云むく蟻乃

なき物をさうす州の庵

のまのゆい満をほく

表のうすつこの文字

をば今もかきり形も情
残るに此の妙くおら
まのまはくさのちの餘
月あや江のまの月
寒く星の影ひのり
て走りに蛙の時出ぬ
艶ふるまはく物
青洲池塘處に蛙約あつて
ささくは半夜をささく

けり夜乃氣さてもは依
多者所かふ九き
塔の上り亦一雙
とふりん

追加

鹿島トリ詣り
志間乃継

継橋乃栗内教之飛蛙不卜

頃白會深川芭蕉蓋印
群蟻鳴向以衆議刺句
馳壳筆青蟻堂仙化子

撰馬三

齋泉白石

山堂

貞享三丙

寅歲閏三月日

新草屋町西村梅風軒

刻

齋泉白石
梅風軒

